

〔海外だより〕

エイズ前線にて

千葉大学医学部外科学第二講座 小 野 田 昌 一

ゲイの本場として知られているサン・フランシスコはニューヨークに次いでエイズ患者の多い所でもある。ここスタンフォードはサン・フランシスコを中心とするベイ・エリアにあり、サン・フランシスコがエイズ最前線にあるとすればこの辺りはその前線にあると言って良いであろう。

しかしサン・フランシスコとスタンフォードでは環境が全く異なっており、エイズ臨床面においては名門スタンフォード大学といえどもサン・フランシスコの施設に一目おかざるを得ない。

地震による騒動も一段落した89年11月29日、スタンフォードの外科系医師を対象として“外科手術とエイズ”という講演が行なわれた。講師は San Francisco General Hospital の整形外科医 Lorraine J. Day 女史である。その内容は数多くの文献・報道を引用してエイズの“しぶとさ”を訴え、最前線の病院における対応を述べたのであるが、実際にはあまり切実感を持っていないスタンフォードの外科医の度胆を抜くものであった。

数多いベイ・エリアの娯楽・報道中心のテレビ局の中で、唯一の良識的な局と言われている KQED から90年1月30日に AIDS Quarterly が放送された。全米各地におけるエイズ対策が映像で示されたが、キャスターによると最も有効であったのはエイズ教育であったという。

たしかに公共施設・病院にはエイズに関する各種の単純・明快なパンフレットが置いてある。まずエイズは学校や集会・プール・店や職場でたまたま接触しても感染しない、感染者と抱擁したり握手したり単に近付いたからといって感染しない、昆虫によって媒介されたケースは無い、トイレのシートでは感染しない事を述べ、無用な恐怖や患者差別をしないように配慮されている。次に感染経路について感染者との性交、麻薬使用者との注射筒・針の共用、胎児感染が挙げられている。実際にはアメリカのエイズ患者の72.7%は gay and bisexual men であり、intravenous drug users は17%と少なくないが、children of parent at risk は0.8%に過ぎない。むしろ hemophiliacs and other recipients of blood transfusion の2.2%の方が多い。

90年4月9日の新聞・テレビで Ryon White 君の死が大きく報道された。彼の病床には Elton John が付き添い、葬儀には Michael Jackson や Donald Trump が参列し、Bush 大統領からの弔電が届いた。彼は84年、13歳の時に hemophillia の治療のために用いられた blood-clotting agent によってエイズに感染し、学校・社会での差別に対して法廷闘争を行ない、勝利を収めた事で知られており、AIDS Quarterly でも学校における彼の生活を紹介していた。

彼が84年に感染したということは意味がある。77年から85年迄に血液製剤を投与されている場合には医師と相談して血液検査を受けた方が良く、と記されている。つまりエイズがアメリカへ入って来たのは77年であり、85年からは血液のチェックが行なわれているので今後血液製剤による感染はないであろうというわけである。

Day 女史が routinely に手術場で行なっているエイズ対策は①二重の靴カバー、②肘カバー、③帽子・マスク ④二或いは三重のラテックス手袋であり、他に膝までのブーツやオートバイ・ライダーが使っているような顔面がすっぽり入るヘルメット等を薦めている。スライドで示された術者は工事現場ならともかく、手術をする格好には見えない。

90年3月11日にエイズ治療薬として実験的に投与された DDI-dideoxyinosine の副作用によって六人が死亡したと報道された。4月18日にロス・アンゼルススの病院に入院した Liz Taylor は ARC (AIDS related condition) ではないと関係者によって発表された。

この6月にはサン・フランシスコで International AIDS Conference が開催される。外国のエイズ患者に対してアメリカが VISA を発行するかどうかの問題になっており、WHO では AIDS Travel Ban を解くように要請している。

マスコミにとってエイズ関連記事は格好の対象であるが、この地域では6月に向かって学問的な問題だけではなく、社会的な意味からも一層論議が激しくなってくるものと思われる。